様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０６００

研究課題名（和文）日タイ間における言語文化の接触と摩擦：戦時下から現代までのタイ国日本語教育史研究

研究課題名（英文）Some Contacts and Frictions of Language and Culture between Japan and Thailand: Studies of Japanese Educational History in Thailand Since During War-time until Present-age

研究代表者
田中　寛（Tanaka, Hiroshi）

大東文化大学・外国語学部・教授

研究者番号：６０２０７１３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：近現代の日タイ両国間でこれまで大きく三つの時期において顕著な言語文化の接触と摩擦が見られた。満洲事変から大戦終結にいたる15年戦争期。高度成長期を経て日本企業が大挙進出した1970年代から1980年代にかけて。2000年以降、日本のクールジャパン、サブカルチャーの波及とともにアニメなどに代表される言語文化の日常的な浸透である。
本研究は日本とタイの言語文化の接触と摩擦を軸に、タイ国日本語教育史を重層的社会現象としてダイナミックに捉えようとしたものである。こうした流れの中で近年のタイ国における新しい日本語教育の振興と諸問題点を浮き彫りにすると同時に今後の課題についても重要な問題提起を行っている。

研究成果の概要（英文）：In the modern era there are three stages of notable contacts and frictions between Japan and Thailand in terms of linguistic culture.The first stage is from the 15-yearwar; from the Manchurian Incident(1931) to the end of Great War (1945).The second stage is the period in which rapid economic growth occurred in Japan(1970-1980), when Japanese companies advanced to Thailand in en masse. The Third stage is the period from 2000 onwards, when Japanese subculture and linguistic culture, like anime, spread to ordinary people of Thailand.
This study aims to capture the dynamics of Japanese educational history in Thailand as a multilayered social phenomenon, with contacts and frictions in language and culture between the two countries as the base.In this context, we attempt to clarify the new trend in Japanese educational promotion and its various problems, and at the same time, to suggest some of the challenges that need to be tackled in the future.

研究分野：人文学（日本語教育学）

キーワード：日タイ言語文化交流　接触と摩擦　対日感情　日本人のタイ認識　異文化間交流　日本語教育史　日タイ言語文化学　国際文化事業

１．研究開始当初の背景

（１）研究の背景

日本語を核とする言語文化の発信は国策、国益の伸長と密接に結びついている。とりわけ日本が国際的な孤立化を深めていった1930年代、東南アジアのタイ（当時はシャム、暹羅）は日本の南方進出の前線基地でもあり唯一の友邦国であった。今日、タイ国と日本との関係は経済、文化的に密接な関係が推移しているが、淵源を辿ればこの時期の日タイ関係の構築がきわめて大なることが了解される。本研究は今日の近代日タイ間における文化交流の源泉をたどり、現代までのタイ国日本語教育史を重層的に捉える試みである。

（２）研究の動機

筆者はかつて1977-1981年にタイ国で日本語教育に従事したが、その後もタイとの研究者教育者との交流を続けてきた。そのなかで痛感されたのは世代間の研究成果の継承、実質的交流の必要性であった。かかる背景から筆者は 2012 年に日タイ言語文化研究所を創設し、その研究母体として日タイ言語文化研究会を立ち上げた。これは日本とタイの若手研究者の育成と新たな視点からの日タイ言語文化学の総合的深化を目指すもので、その中軸にタイ国日本語教育史を位置づけようという試みである。これは日本語教育の世界はきわめて学際的、社会学的、歴史学的な連携のうえに築かれる、重層的な学問分野であるとの認識に基づいている。

２．研究の目的

（１）申請時における研究目的

本研究は近現代における日本とタイの言語文化の接触と摩擦の時期を大きく３つの時期、すなわち[1]1930年代から1945年までの戦時下における言語文化の接触と摩擦、[2]戦後、とくに高度成長後の1970年代に日本企業が大挙「南進」し、新たな接触と摩擦が生じた時期、さらに[3]現代のクールジャパンに代表されるタイにおける日本文化の受容、日本語教育の現状、という時期に分け、それらに通底する諸問題を明らかにするとともに、新たな視点から今後の日本語教育の課題を模索する出発点を見いだすことを狙いとした。

（２）研究開始後の研究目的

上記のような壮大なスケールを限られた期間で均質的に統合することは容易ではなく、今般の研究はそのおおまかな輪郭を明らかにし、とりわけ戦時下の言語文化交流に重点を置くこととした。また、その延長に近現代史としての戦後のタイ国日本語教育史、現代の諸問題を位置づけることを狙いとした。その顕著な成果は４．で後述する２種類の報告書（研究論文集および原典史料集）に示されている通りである。

３．研究の方法

（１）上記本研究課題に鑑み、まず戦時期における言語文化の接触と摩擦に関する資料の渉猟、収集に重点を置いた。当時の各種雑誌に紹介されたタイ国事情に関する記事、論文をできるだけ広範囲に求め、文献学的な位置づけを試みた。同時に、基礎的な史料についてはこれをデジタル化し、必要に応じて参照できるよう資料集を作成することとした。

（２）研究成果を発信すべく日タイ言語文化研究会研究大会を毎年東京とバンコクで開催し、若手研究者、教員の参加により新しい日タイ言語文化学の建設を指向した。これらの発表原稿は修正を加えたのち、複数の査読者による校閲を経て学術誌『日タイ言語文化研究』に掲載された。(4.(2)(3)を参照)

４．研究成果

今回の研究ではとりわけ戦時下の言語文化接触では日本語教育事業の展開および日本タイ文化会館の構想など、大東亜共栄圏構

想の中での文化建設（日本文化会館）が進められたことを幾分くわしく検証することができた。戦後ではとくに 1970 年代の反日感情の高揚期にタイ人のための日本語教育のプログラムが本格的に開始されたこと、またその流れの延長に泰日工業大学の開設といった成果を検証することが出来た。以下、本研究の国内外における位置づけ、ないしインパクト、および今後の展望について大きく９項目を立てて述べる。

（1）研究論文集と原典史料集の編集

最終年度にあたり、計１１名の研究者の研究論文集を作成した。日本語教育、文化事業建設、文学交流など多岐にわたり、日本語教育史を日本とタイの言語文化接触の観点からとらえた論文集として貴重な成果と位置付けられる。筆者の論文のなかには解題を含め５．で後述する成果の学術論文５本以外にも、研究期間以前に発表された関連論文を修訂したもの２本、さらに新たに書き下ろしたもの１本、計９本が収録されている。

また同時に、筆者の渉猟した原典史料を６項目にそって収めた。これらの原典史料は今後も同研究を進める上で極めて示唆に富む内容を有し、従来分散して参照が困難であった史料を集約した点は研究者に対する大きな寄与となる。

（2）学術誌『日タイ言語文化研究』の継続的刊行

研究期間内において、筆者が主宰する日タイ言語文化研究所および日タイ言語文化研究会で発表された論考を学術誌『日タイ言語文化研究』におさめた。本学術誌は博士後期課程にまなぶ大学院生の研究成果を発表する有意義な機会となった。学術誌は日本とタイの主要大学などの機関、また英国ロンドン大学ＳＯＡＳにも寄贈され、今後も刊行の継続が要望されている。

（3）日タイ言語文化研究会活動の学際的組織化

研究期間内において、筆者が主宰する日タイ言語文化研究所および日タイ言語文化研究会では定例研究大会を日本とタイ側で開催した。第４回日本大会ではタイとの通信衛星を用いて日タイ同時開催を実施したことは今後の学際的研究の方向性を示唆している。

（4）人的学術交流の深化

研究期間内において、筆者が主宰する日タイ言語文化研究所および日タイ言語文化研究会では定例研究大会を日本とタイ側で開催した。また、これに関連してタイ国内の研究教育者との交流が深化した。今後の研究の進展に多大な貢献をなすものと期待される。

（5）機関間交流の進展

今般の研究に於いてタイの諸大学との交流に一定の成果が見られた。たとえば、スーナカリンウィロート大学人文学部、チュラロンコーン大学、チェンマイ大学人文学部および日本研究センター、スィーパトゥム大学、などである。また、日本タイ協会の研究員との連携が生まれたのも特筆すべき点である。

（6）若手研究家養成、学術支援の進展

本研究の一環として行われたセミナー、研究会では若手のタイ人研究者の養成に寄与した点がきわめて大きいことを挙げなければならない。掲載された論文の中には当著者の学位論文を構成した論文もあり、また大学教員の昇格審査にも採用された論文なども含まれている。

（7）実地調査

筆者は 2015 年 8 月 9 日から同月 24 日までタイ国（タイ北部、タイ中部、タイ南部）における調査を実施した。概要は以下の通りである。

①2015 年 8 月 9 日～同年同月 12 日　タイ国チェンマイ大学人文学部訪問、日本文化センター所長、副所長と面談、タイ北部における日本語教育の現状と課題について意見を交

換した。当大学に各種日本語教材を寄贈した。また、筆者のかつてのタイ語の恩師であるパイリン女史に３５年ぶりに再会し旧交を温めたことが特筆される。

②2015 年 8 月 13 日～同月 15 日　タイ国ピサヌローク県、スコタイ県を訪問。当地における日本語教育事情を調査した。おもに外国人観光事業における“ 言語景観 ”を調査した。

③2015 年 8 月 16 日～同月 18 日　タイ国バンコク市のシーナカリンウィロート大学、およびスィーパトゥム大学を訪問、日本語教育関係者との意見交換を行った。またバンコク市最大規模をほこる泰日経済技術振興協会附属語学学校を訪問、関係者と意見交換を行った。このほか、国際交流基金バンコク日本文化センターを訪問し、所長と面談、意見交換を行うと共に、図書館に研究書、教材を寄贈した。バンコク在住の日本人と面談し、日本言語文化受容の現状について意見交換を行った。また、日本言語文化接触の具体的な現象として日本商品などに見られる日本語広告、看板などの“ 言語景観 ”についても出来る限り調査を行った。その一部は研究成果[2]の③などで紹介された。

④2015 年 8 月 17 日～同月 22 日　タイ国南部のチュムポン県を訪問、太平洋戦争勃発時に日本軍が上陸したポイントを訪問し、慰霊碑に献花を行う。また住民への聞き取り調査を行った。タイ南部最大規模のチュムポン国立博物館を訪問、資料調査を行い、日本とタイの交渉史について各種知見を得た。

（8）教育関係者との交流

タイ国での実地調査、および国内タイ留学生（神田外語大学、東京外国語大学、大東文化大学など）との意見交換のほか、国内研究者との交流、意見交換を行った。

2016 年 3 月 25 日、国際交流基金主催のタイ教育関係者アドボカシー招聘事業の懇談会に参加し、タイにおける中等教育レベルの日本語教育の拡充及び質的向上を目的として、タイ中北部及び北部地域の日本語教育において影響力や功績があり指導的な立場にある校長･教育行政関係者の方々17 名と親しく意見を交換した。当事業は基金で実施している研修の視察や文科省及び高校２校を訪問するほか、教育関係者の方々との意見交換を行うもので、今後の交流構築のためにも有意義な機会となった。

（9）今後の課題

今次の研究期間においては主として戦前戦中の日タイ間の言語接触に重きをおいたが、引き続き資料の発掘と整理が要請される。研究期間中に大阪大学比較文学専修主催国際シンポジウム「日タイ交流史研究の新地平」がタイ国バンコク市、チュラロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座ビルで開催されたが、こうした成果とも連携しつつ進めていくひつようがある。また、三時期の言語接触のメルクマールのうち、70 年代、現代のタイ国日本語教育史については引き続き現地大学関係者と連携をとりつつ、進めていく所存である。

＜引用文献＞

勉誠出版編集部『アジア遊学』№.57 特集：バンコク―国際化の中の劇場都市―　2003.11

石井米雄・吉川利治編（1987）『日・タイ交流六○○年史』講談社.

田中寛（2015）『戦時期における日本語・日本語教育論の諸相』ひつじ書房.

村嶋英治・吉田千之輔編（2013）『戦前の財団法人日本タイ協会会報集成解題』、研究資料シリーズ№.4　早稲田大学アジア太平洋研究センター

５．主な発表論文等

[雑誌論文]　（計 5 本）発表順

著者名、論文名、雑誌名、査読の有無　巻号数、年度　頁数の順

①<u>田中寛</u>「「満洲」という歴史体験と感情の

記憶－「モラルの相克」から考える遺産の超克－」日本植民地教育史研究会『植民地教育史研究年報第 18 号　植民地教育支配とモラルの相克』　（単著）査読有 2016　晧星社 82-102

②田中寛「資料：戦時下における日タイ言語文化の接触と摩擦―朝日新聞掲載記事(1937～1945)を中心に―」（単著）、『大東文化大学紀要』（人文科学）54 号　査読無　2016 157-184

③田中寛「戦時下帝国日本の国語・日本語政策の一断面－『教育週報』の掲載記事を例に－」(単著)『東洋研究』第 196 号 査読無 2015 29-68　大東文化大学東洋研究所

④田中寛「戦時下のタイにおける日本語教育の一断面―三木榮の『日暹会話便覧』の構成について―」（単著）、『日タイ言語文化研究』第 3 号　査読有　2015 日タイ言語文化研究所 35-50

⑤田中寛「戦前戦中期の日本におけるタイ事情の紹介―主要文献から見る―」(単著)、『日タイ言語文化研究』第２号　査読有 2014 日タイ言語文化研究所　23-40

[学会発表]（計 8 件）発表順

発表者名、標題、学会・研究会名、発表年月日、発表場所の順

①田中寛「『語りつぐ戦争』にみる日本人の戦争記憶―「被害」のなかの「加害」意識―」（単独）、「戦争・対立から平和へ―歴史研究の現場からのメッセージ―国際シンポジウム」、2015.11.21　日本華人学術会議主催　千葉商科大学（千葉県・市川市）

②田中寛「安藤浩氏のタイ語学・タイ学――草莽の異言語異文化研究へ／から」（単独）科研成果発表会　2015.11.8　大東文化会館（東京都・板橋区）

③田中寛「戦時期におけるカナモジカイと『カナノヒカリ』にみる日本語進出論」（単独・依頼）2015.8.23　日本のローマ字社（東京都・文京区）

④田中寛「『支那語早わかり』から『大東亜共栄圏語早わかり』へ―タイ語語彙の特徴を中心に―」（単独）日タイ言語文化研究会第 3 回東京大会　2015.7.25 大東文化会館（東京都・板橋区）

⑤田中寛「戦時下帝国日本の国語・日本語政策の一断面－『教育週報』の掲載記事を例に－」、植民地教育史研究会研究例会 2015.6.26　相模女子大学（神奈川県・相模原市）

⑥田中寛「「満洲」―戦争体験・記憶・責任:思索する言葉の力と想像力―」（単独）、植民地教育史研究会大会　2015.3.14　大手前短期大学（兵庫県・伊丹市）

⑦田中寛「戦時下のタイにおける日本語教育の一断面―三木榮の『日暹会話便覧』の構成について―」（単独）日タイ言語文化研究会第 2 回東京大会　2014.7.7　大東文化会館（東京都・板橋区）

⑧田中寛「戦時体制下日本におけるタイ事情紹介記事について――一次文献調査からの報告―」（単独）、日タイ言語文化研究会第 2 回東京大会　2013.7.13　大東文化大学板橋校舎（東京都・板橋区）

なお、①は戦後七十年を記念して開催されたシンポジウムで、本研究とは直接かかわるものではないが、戦時期を共通項とするため、研究成果の一部に収めた。

[図書]（計 0 件）

６．研究組織

（１）研究代表者

田中　寛（TANAKA,hiroshi）

大東文化大学・外国語学部・教授

研究者番号：60207131